

新朝

今昔物語

藤舎 卷之七
世宗部

七



今昔物語部七目錄

○世俗傳

一 源宛平良文合戰語

二 源頼光朝長射狐語

三 平貞道於駿河害人語

四 藤魚親孝子為盜人被捕質依頼信朝長言免語

五 源頼義朝長射殺馬盜語



五曜

今昔物語部七

一

今昔物語 倭部七

○世俗傳

一 源宛平良文合戦諸

今いひて東國より三回源二源宛武藏守佐男内村

五郎平良文高望王男〇從五位下鎮守府將軍といふ二人乃其わたりは

とる意趣はなかりしむ。其の道はなほとる程なり。あ

がしよ中わくまはなり。あつた良文が家人をまてばそ

るふ。三回源次常はりの村をみあつたつたをまて

我より中くゆふはな。何よりつきてもいひしむ

とよふ。あつた不使中わりの由はな。いひしむ

お。乃侯とけはしてとせわらひのてわのいらぬ
 系遠くおそくして。良文宛が胸板とさうらうて矢と
 設けよ。宛るより落るやうにして。宛ふらうらうて。ちかた股
 寄りわらうらう。宛又おそくして。良文が胸板と矢
 して射るる。良文身をふりて。宛にらうらう。腰高
 わらうらう。そのらぬがひよあそとせらうらう。びも。各
 せらうらう。馬の速者わらうらう。宛り。勝負たうら
 うら。良文大に感して。雙方のうらう。矢らうらう。まに
 わら種も。びく。勝たれたとらうて。甲しなれたとわら
 うらうら。足下と我をとりらうらう。ち極もあし。きく武



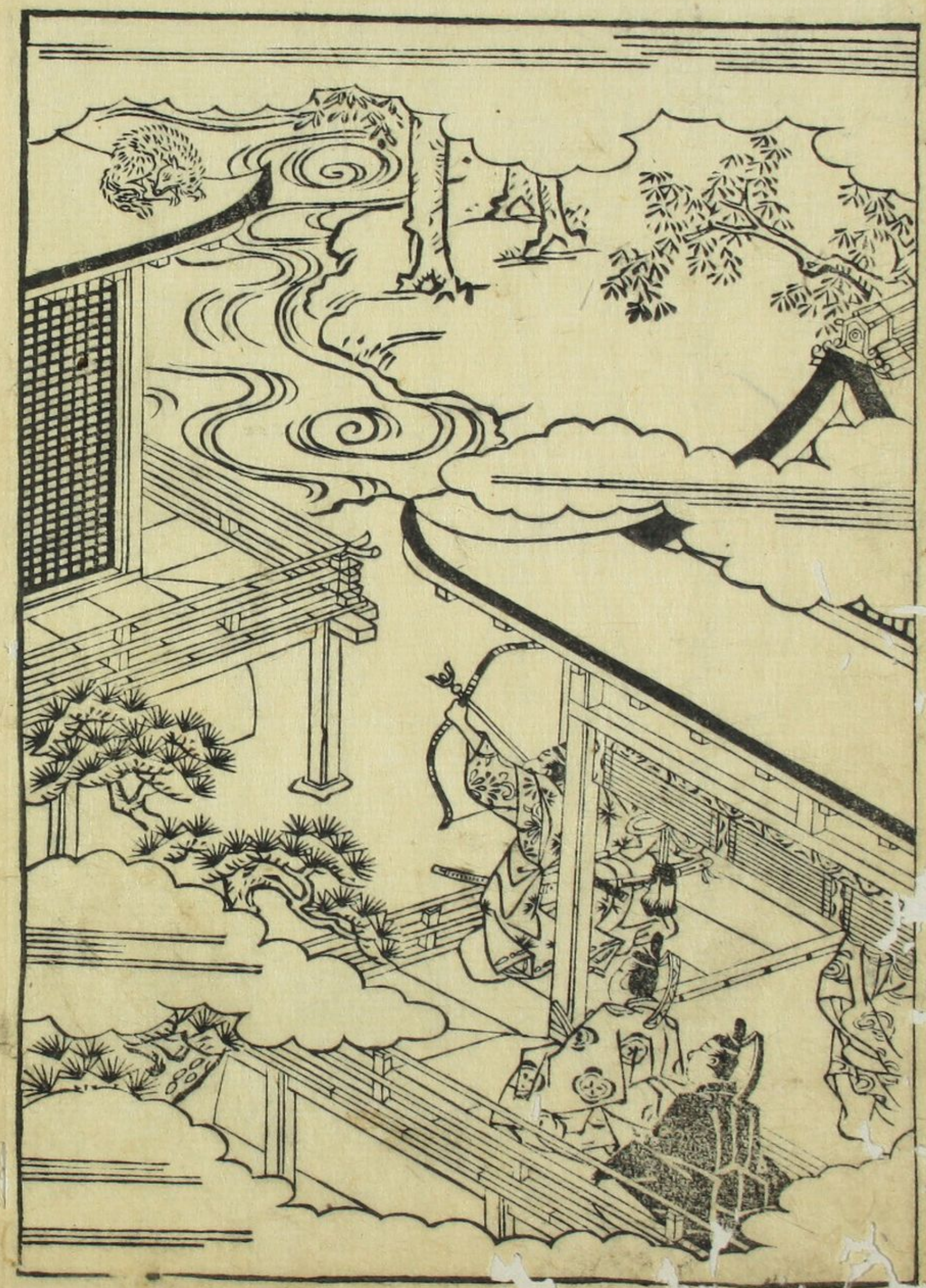
勇につきてそのいづみなり。さうらふはあめも雲もあふ
 ねらふにちなり。今より後和祿せんといひ。宛ててい
 ねるに餘なき。我も同じうなりとて。双方軍を引
 て帰るなり。それよりして。宛ててい。さうらふはあ
 めも雲もあふ。いづみなり。さうらふはあめも雲もあ
 武勇はあふ。いづみなり。さうらふはあめも雲もあ
 二 源頼光朝臣射抗語
 今いじうと三條王宮の春宮とて。東三條にやうは
 あり。寝殿乃辰とて。方なり。清堂の宛ててい。宛
 物ありて。外に。さうらふはあめも雲もあ。宛ててい。宛

今いじうと三條王宮の春宮とて。東三條にやうは
 あり。寝殿乃辰とて。方なり。清堂の宛ててい。宛
 物ありて。外に。さうらふはあめも雲もあ。宛ててい。宛
 今いじうと三條王宮の春宮とて。東三條にやうは
 あり。寝殿乃辰とて。方なり。清堂の宛ててい。宛
 物ありて。外に。さうらふはあめも雲もあ。宛ててい。宛
 今いじうと三條王宮の春宮とて。東三條にやうは
 あり。寝殿乃辰とて。方なり。清堂の宛ててい。宛
 物ありて。外に。さうらふはあめも雲もあ。宛ててい。宛
 今いじうと三條王宮の春宮とて。東三條にやうは
 あり。寝殿乃辰とて。方なり。清堂の宛ててい。宛
 物ありて。外に。さうらふはあめも雲もあ。宛ててい。宛

平家物語(神皇正統記)

卷之三

今昔物語の御巻二



今昔物語の御巻七

今いひしう源頼光頼朝の事。客人のまことありし酒の
 みわをいひたり。その時、才頼信頼長しあり。才頼信真道よ
 平真道。号村岡五郎 四天王一人 頼子忠あそおぢたり。頼信真道よ
 ひらいて。駿河國よある何某といふ者。我しをれをさ
 たり。母うれが頼あそおぢとよ。他人の事をいふに
 事ありふし。真道思ひてさす。我は敏はけり
 ぶ河よの流舟よとねす。いふ家のまかりたり。い
 さまいふはけり。いさま。を程のまかり。いふに
 のまべた。いふ敏はけり。いふに。いふに。いふに。い
 らる。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。

人せむ中にて。人をころと事とあり。いふに。いふに。
 いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 ざらと。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 のまに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 真道も。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 うら。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 けふ。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 頼信。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 同。真道も。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。
 乃敏。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。いふに。

今昔物語の和朝卷七

今昔物語の和朝巻七
中にておぼしめす所の事いふ間たうくさしてやんばと
ゆふて多しげ男あやうんけはむさうらむしび。思下ら
ちうめむすんともいひ。今白までちう落つごらうと
今のもよと聞てうけくこそ。但しあまひ彼敵よその
すしては事なさんとめむらも。我等かどの老女とむと
くゆはるや終らん中。頬嘆てつう。貞道大い腹を
て奴がいつんともう。軽信よそのまして終るいあや
ちう神とれいひいひ。今白よりいの中とら終るまむと
しむらん。目さあくは言しうあくはよ。ちう行よあけけ
射るる。頸たて河内ぬよまんとちうあちう出あく言

少小なりと打ちつらうぐらひは成く。貞道師を去に
かくとちう也。馬の腹すちち相篠員あてく。退る
ゆ。廣き路よおめて。大よさけびてけうけ。彼男
ちうの思ひつら事よ。いしてあくく。いひく。ぬ
貞道をぐ一矢よ射あ。右具く。ちう高きとと四
五人射倒しけし。残ふもの四方へ教く。迹失
く。やうと彼男が首ぬあく。ちういしらのやうと軽信
相たぬあくともいひ。頼信相たすうらむ。いして。馬よ
鞍置て貞道いごもさう。うのら貞道人よわいて
ちうちうい。けくがく通る。ちう奴が。ちう一言いす

今昔物語の和朝巻七

多射ころさるも。河内飯のやまのばがくころ殺
かり。あつれれれ威ちりころと語りくばさく人
いしむれれころとせん。信はささる也

四 藤魚親孝子為盗人被捕質依頼信朝長言免詰

今いしむ河内守源頼朝に相見。上野守にして其國
あり。其乳母子に兵衛射る。親孝とつゝものあり。
これと格ちころ名かり。あつる小親孝が家よ盗人を
捕つてをとりしぐ。つゝとままん。逃出く。親孝が子ろ五
六歳ころれ男子のころつらつら。わらけら。けり。けり
ける。瓜質よあつる。養金の肉ころ入く。此兒と膝の下

る。ぬせ。刀ぬき。て兒の腹よりわき。母ころその
河よ親孝の館よ有ころ。家人名けり。して。あつと
バ。盗人質に取つると告げし。親孝中ころ。けり。て
あつころ。小盗人養金を肉も居く。兒が腹より刀ぬ
けり。わき。いころ。あつる。小親孝の。魂ころ。え。て。せん。さ
なり。ころ。より。格ち。け。さ。ころ。ア。ア。さん。と。め。あ。ま。ば。
げ。小。も。寡。て。う。む。り。ん。と。せ。ば。さ。ら。し。ま。れ。は。殺。さ。る。と。志
ころ。ん。後。け。け。ぬ。を。ま。り。ころ。さ。さ。み。ころ。も。何。の。益。も。あ。ら
や。郎。等。も。し。ら。ころ。ま。り。そ。き。く。外。を。母。の。い。て。い。て。
館。け。り。めて。守。の。居。ころ。あ。り。め。ん。に。母。の。あ。る

氣色にて出たれ。守ねざりまてこそは何まどや。同
親孝をいひしるもらけらる子の孝をぬ。盗人は質し
てして作也と。けりていふけり。守もして。あつり
われども。家もて。常は。わづらひ。鬼にも神も
さうあはるんと。さきさき。さうさう。れ小童一人を
けりて。さうさう。さうさう。のあつて。さうさう。さ
身をたれし。妻子をさし。忠義の道ゆり。さうさう。
さうして。我りて。さうさう。さうさう。さうさう。さ
て。親孝。さうさう。盗人が。あつる。善悪の。口にて。さ
るる。盗人守の。ね。さうさう。さうさう。か。と。さうさう。さ

が。と。寡。あつ。ば。さう。さう。さう。さう。さう。さ
と。く。其。童。と。質。小。童。の。命。を。さう。さう。さう。さ
只。孝。を。さう。さう。の。さう。さう。さう。さう。さ
の。と。盗。人。の。い。ひ。も。あ。つ。る。声。を。さう。さう。何。れ。此。鬼
を。さう。さう。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と。さう。さ
り。さう。さう。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と。さう。さ
た。サ。も。つ。其。力。を。投。よ。我。さう。さう。の。い。ひ。さう。さ
み。も。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と
の。盗。人。志。づ。く。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と。さう。さ
さう。さう。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と。さう。さう。の。い。ひ。作。也。と

兎をいま起してゆるゆるめればけつをひげ入ぬ。時
守がうきうき去て師をたぬよびて彼男をけしき
ゆきつらび。師をたぬ男が夜の頸をぬく。おのれを
しむきとらひ。親孝の盗人をまらぶと侍たりしと
頼信制しとらしてしむきつらび。けぬ身よびくてもよ
き。命やせらるそを備ふんとらひ。我ゆるせしつは
あまひて賞とゆるしとらひ。物はわゆる奴まらば
中へゆるしとらて十日づきの糧と乾飯をかじ
りてゆるしとらせ。草薙りぬきて是よりとせらひ
事去べしとあまひつらびて馬よきとみげたり。

頼信一言ぬいたらびりしうば。世もつて信を守らる事
を感して。兵乃感つて人おれつとゆえし。うの
質にそつらひる者。成長のしる令嬢よみかたも
し。明秀阿闍梨といひて人倍つてえとら也。

五 漁頼義頼長射殺馬盜詰

今いひし河内前白河に頼長。東國の馬よき馬
もらうりや。阿闍梨はよき馬はを耕し
て。其馬よきとら。馬盗人追てける。おのれ
しむきとらひ。ゆんとあつて。しむきとら。そのや
り。馬よきとら。そのや。おのれ。阿闍梨と

がしめよしはみまはたれ。東にりよした馬はいてあり
わらわめ関しむ。いしつらまていせざうあなり。はらうり
老いした馬はいづら。今夜いへるもして見たりひび。明
朝みるもよほつづ。とまやふおれとらしむれば。於義を
ざうあめめめいといさう終つとまて。まづいへ今夜いし
宿直仕つて。明朝いせつとつして。物倍あつて。あま
めよ。又寝あふ入らづ。於義よりさういへよらして。昨
あつら。あまふらうりにあひ音めゆぶして。馬盗人志の
いへるさふあつていし。あつてさうめ。いへ。厩の方より
声をあけて。あまふらうりあつら。盗人といへると

よごは音いづら。於信あつたふ思はぬ。関て。於義いよま
うそと起つて。胡録をうた負殿よけして。馬はいて
あつて。賤の鞍あつて。あまふらうりあつて。あまふらうり
いへるさふあつて。いへる。於義よりさういへよらして。
いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。
丸寝とあつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。
あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。
あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。
あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。
あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。
あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。あつて。いへる。

今昔物語 柳菴雜記
圓心いかにいふに盗人のぬすみの馬よきまて今人の
逐得たりとまうして川をひらりて行なふ。頼信は
そを瓜園て目したるもあられなくさそ敷るに。頼義が
あつめりしづねにも。若んをわざとらんをさるや射す
といふ言はたまはれぬ。ざらにんつとあつる音
しきう。射すもさうとゆつて人もあつる馬の澄
の音かうくと志事さば。頼信はかくさたよはりつとこ
馬はあつる本はどぞらうつらうもそ。あつる瓜園と
まふび障りさう。頼義はたたりをせわづらて。瓜園
て障りさうとたうとて。即ちさうして逃りに園つとて。

一人二人は道にあらうあひかり。京の家よ障りつとせれば。
二三十人ほどあまらう。頼信はよ障りつとせ。いまも夜も
あまらう。その中に奥よへく寝あまらう。頼義は取
しつる馬は即ちあらう。是れ寝あまらう。頼信
あつ後頼信は。頼義と呼て。おれは其馬引出せと
て出で。頼義はえやひらふ。その馬をあらう。たつて
つらばはらりつとせ。つらばはらりつとせ。つらばはらり
つとせ。つらばはらりつとせ。つらばはらりつとせ。思は
夜盗人を射る。頼信は。つらばはらりつとせ。つらばはらり
あつる。つらばはらりつとせ。つらばはらりつとせ。つらばはらり

今昔物語 柳菴雜記

